

「地理的な離島はあっても、人の命に離島があってはならない」

千葉県立東金病院 内科医長 古垣斉拡

第 2 回 ; 離島診療所の医療の現状 (診療所を取り巻く医療の厳しさ)

【ある夏の日診療所勤務一午前】

離島診療所勤務の 1 日を紹介したい。毎朝 7 時半過ぎには自宅を出て、8 時前から診療所の 19 床の病棟を回診している。実は前日の深夜に 2 歳の子供が熱を出したとのことで、診療所に出かけて対応した。診療所には医師 2 人しかいないので、毎日どちらかが宅直を行い、時間外・深夜の急患にも対応しているのだ。そのためすこし眠いのだが、患者さんが朝食を食べる時間に回診をすることで、その様子を見ながら病状の回復程度もみている。その後診療所スタッフで朝礼を済ませてから、外来診療を開始した。外来ではすでに待合室が多く患者さんでにぎわっている。今日は糖尿病外来であり、患者さんの話をゆっくりと聞きながら、生活指導等を行う(1 単位平均 20 名)。もう一人の医師は一般外来で診療を行っている(1 単位平均 30 名)。すると救急車が途中で入ったので、一旦外来診療を中断して救急室に向かった。患者さんは当診療所で在宅管理を行っている 80 才の女性で、昨夜から熱が出ているとのこと。精査して肺炎と診断したので当診療所で入院管理を行うことにした。バタバタと救急室で入院の対応をしながら、外来の患者さんへの対応も気を配る。しかも午後から訪問診療があるため、時計を見ながらいつ昼食をとるか考えていた(腹がへっては戦はできぬ)。

【ある夏の日の診療所勤務一午後】

もう一人の医師に診療所の外来をまかせて、午後から訪問診療に出かけた。いくつかの訪問診療のコースがあるが、今日はお気に入りのカケロマコースだ。隣島の加計呂麻島に貸切り船(10人乗りぐらいの漁船)で訪問診療を行っている。診療所のある瀬戸内町古仁屋の港から約15分かけて貸切船で加計呂麻島の港に向かった。今日は天気がいいので最高の往診日和だ！まばゆいばかりにエメラルドグリーンの大島海峡を渡り、加計呂麻島の港から歩いてゆっくりと患者さんの自宅に向かう。「暑いですねー」と患者さんと言葉を交わし、診察後には冷たいお茶を頂きながら、患者さんから島人(しまんちゅ)の生活ぶりや昔の診療所の話を聞いた。患者さんも診療所ではみせない、おだやかな表情をされる。多忙な診療所勤務であるが、この訪問診療での時間は私にとって大変に心安らぐ時間でもある。患者さんの生活の場に入り、そこで患者さんの生活史や家族背景などを知ることは訪問診療の醍醐味でもある。加計呂麻島の3箇所の港を貸切り船で移動し、約3時間で8人の患者さんの自宅を訪問した。それが終わる頃には夕方になっていた。診療所に帰ると訪問診療のカルテを記録・整理して、昼に入院した患者さんの容態をみるために病棟へ行った。追加の指示を病棟看護師に伝えると帰宅した。今日は宅直ではないので早目に自宅に帰って、家族と過ごす時間をもつ。仕事のオン・オフの切り替えをうまく行えるかも、このような離島・へき地の勤務では重要なことである(それが難しいことも多々あるが・・)。

【診療所の外来診療と病棟管理】

南大島診療所の外来は高齢者から乳幼児まで幅広い患者さんが受診する(約1-2割は小児である)。そのために診療所での勤務はプライマリ・ケア能力を磨くまたとない機会となる。2006年度の月平均外来件数1090件、1日平均外来件数74名であった。また診療所の病棟管理ではcommon diseaseを中心に幅広い疾患群となっている。呼吸器(肺炎・気管支喘息等)、循環器(心不全・不整脈疾患等)、消化器(消化性潰瘍・細菌性腸炎・イレウス症等)、内分泌(糖尿病のインスリン導入等)が主な疾患群である。入院患者層は60才以上で約97%、特に75才以上の後期高齢者で約75%を占めている。2006年度の平均在院日数16.1日、年間入院患者件数600件であった。

【在宅医療と救急医療】

高齢化が進み、外来受診できなくなった患者様が在宅管理に移行することが多くなるので、管理件数も年々増加している。2005年度の訪問診療管理・月間平均件数121.5件であった。「患者様の自宅も我が病棟」の気概をもって在宅医療にも力を入れている。診療圏が広く、訪問診療に4-5時間かかる場合もある。

また2003年度には救急車での当診療所への搬入件数が年間129件、診療所からの救急搬送件数が年間127件となり、全日本民医連の有床診療所(23箇所)で最多であった。離島診療所では医療過疎のために救急車の搬送先の病院が少なく、診療所に搬送することが多くなっているのだろうか。搬送先の病院まで約50分かかり、かつ急峻な山道を走るために同乗する看護師や医師の負担も増える。さらに重症者の同乗は医師が行っており、急性心筋梗塞、脳出血、細菌性髄膜炎等の患者様を搬送している。救急車内で急変することもありえるので、緊張しながら同乗することもしばしばである。

今回はプライマリ・ケアの現場での研修を志望するきっかけとなった、イギリスでの短期留学について報告したい。

在宅人工呼吸器管理の患者さん宅にて；

離島の一般病院(奄美中央病院)での在宅診療では数名の在宅人工呼吸器管理を行っている。後期研修医が在宅での主治医であり、病院の呼吸器科指導医のもとで管理を学ぶ。写真中央のパソコンは患者さん本人が使用している。

